

平成28年度第1回湯梨浜町泊地域小さな拠点検討協議会議 議事録

日 時 平成28年9月20日(火) 19時～20時45分
場 所 湯梨浜町中央公民館泊分館 2階大会議室
出席者 朝日田 卓朗、石沼 友、岩本 馨、山田 志伸、鷺野 星夫、田嶋 昭彦、
遠藤 公章、渡邊 由佳、中原 政喜、石井 美佳代、坂田 克
オブザーバー 泊6区長 石原 清弘
県中部総合事務所地域振興局 栃本リーダー、久保田係長
事務局 山根孝幸副町長、岩崎正一郎みらい創造室長、谷岡 雅也主事

1. 開会

皆さんこんばんは。定刻となりましたので、ただいまより第1回となりますが、湯梨浜町泊地域小さな拠点の検討協議会というものを始めさせていただきたいと思います。私、湯梨浜町役場の4月から、みらい創造室というものが新設されました。よろしくお願ひします。皆様方におかれましては、公募という形とですね、あとは色々な諸団体の方から選出いただきましてどうもありがとうございました。本日はお仕事で大変お疲れの中、またこういった悪天候のもと、足元の悪い中、ご出席をいただきまして誠にありがとうございます。まず最初に、湯梨浜町の副町長の方よりごあいさつをいただきたいと思ひます。

2. 副町長あいさつ

失礼します。私、湯梨浜町役場の地方創生担当の副町長を4月からやらせていただいております。よろしくお願ひします。本日は、お忙しい中、また台風で足元の悪い中お集まりいただきましてありがとうございます。小さな拠点ということなんですけれども、政府が進めている地方創生の項目の中にはこういう小さな拠点とか、それから生涯活躍のまちとか結構大きなものがあるんですけれども、その地方創生の2年前くらいから始まって、この小さな拠点という検討がですね、泊におかれましてですね、始まったというよりも伺ったところによりますと、合併前の泊村であられたころから、そういったことをしなくてはいけないという検討もなされていると伺っています。そういう意味では、課題というかですね、そういうものがずっと、あったということになりますので、今回第1回目の検討協議会というものが開催されたというのは、すごい前進だと思っております。それで、小さな拠点というのは、例えば施設物、ハコモノをですね整備するというものもありますが、ソフト面でのどういうふうにしていくかという検討も、大事ですけれども、例えばハコモノでいきますと、バブルのころであれば公共事業の予算というのは結構ついて、例えば公民館とか分庁舎とかいろいろありますけれども、全く同じもの、それ以上のものは作ることができたと思ひます。ただ、今はなかなか厳しいというものもありますので、税収的にも厳しいということもあります。それから当然町としても地方創生で、なぜこのようなことをやるのかといひますと、ご存じの

ように人口が減少しているというものの歯止めをかけるとかですね、東京に人口が集中しすぎているのを是正するというところの観点でやっているんですけども、そういう風にやっただとしても、人口が減るといのはもう地方においては大部分のところでは生じてくるわけなんです。例えば湯梨浜町でしたら今 17,000 人の人口があるんですけども、人口ビジョンが去年とか検討されたんですが、その中で言いますと 17,000 人が地方創生とか工夫して、なんとか 12,000 人というのを例えば 4 5 年後ぐらいもですね、維持していきましょうというところなんです。そうしますと、何もしなかったら 10,000 人を切る、9,900 人ぐらいになりますので、それを考えるとですね 44 年後ぐらいにはですね今の人口の言えは 3/4 とかですね 2/3 くらいなんですよ。ということはかなりの人が少なくなってくるということが、明らかになっています。そういう風に人口が減ると当然税収も減ってくるわけですし、役場の方でもそういう施設物をいっぱい作ったとしても、維持管理というものがもうできないようになりますので、この小さな拠点を進めていくにも、ハコモノを単純に同じものを作るのではなくて、集約するとかですね、というようなご検討もぜひともお願いしたいと思います。それから、まちづくりにつきましてはですね、従来行政主導でやってきてたところも多かったんですけども、なかなか行政主導だといいいものができないということもありまして、地元の方を中心というか主導でですね、進めていくというのが西暦 2000 年代くらいから主流になってきているというところがあります。そういう先ほど申し上げたように、建物とかを集約したりするということは、生活空間が変わってきたりとかですね、それから地域資源を活用していくというような観点でやっていかないといけないというところだとすると、地元の方、実際に使われる方がよく御存じなので、そういった知識を反映させていくというのが大事、それを使っていく方がですね、知恵を出されていいものにしていくというのが、この目的だと思っていますので、お忙しいと思いますがなんとかご協力のほどよろしく申し上げます。本日はありがとうございます。よろしく申し上げます。

3. 委員紹介

続きましてレジメの方に第 1 回目ということもありまして、皆様ご存じの方、また初めての方もいらっしゃるかと思いますので、順番に自己紹介の方をしていただければと思います。

～各委員、事務局自己紹介～

4. 会長、副会長の選出について

～会長 遠藤公章氏、副会長 石沼友氏が承認された。～

(会長)

どこまで、何ができるか、これから勝負かなと思っております。一生懸命力をつくしてやっていきたいと思っていますので、ぜひ皆さんもご協力よろしく申し上げます。

(副会長)

副会長という大役を仰せつかりました石沼です。会長が優秀ですので、私は後ろについて

いって、住民の批判を受けることもあると思いますが、その時の謝り役になろうと思います。皆さんご協力をよろしくお願いします。

(事務局)

それでは、これ以降は会長さんの進行で進めていただければと思います。

5. 「小さな拠点推進事業」、「小さな拠点施設整備事業」

(会長)

それでは、レジメにしたがって5番の「小さな拠点推進事業」、「小さな拠点施設整備事業」について、資料を事務局から説明していただいてよろしいでしょうか。

(事務局)

一番最初にですね、本日事前にお配りしたんですが、資料1、2、3、4と本日お手元にですね、こういった過疎計画の資料1枚ものです、ございますでしょうか。それではまず、「小さな拠点推進事業」ということで、概要について担当の方からさせていただきたいと思います。

～資料1に沿って説明。泊地域小さな拠点検討協議会の役割についても説明～

6. 泊地域の現状について

(会長)

続いて6番の泊地域の現状についてということで、ご説明をいただきたいと思います。

(事務局)

～資料2、4に沿って説明～

7. 今後の進め方について

(会長)

続いて7番の今後の進め方についてというところで、説明よろしいでしょうか。

(事務局)

～資料3に沿って説明～

(会長)

ひととおりこの資料の説明の方がございました。皆さんの方からご意見なりこの資料について「ここを聞きたいんだ」ということがありましたら、できるだけざっくばらんにですね、楽な感じで話しやすい環境を作りたいと思いますのでなんでもちょっと意見がありましたら伺いますけど、まず資料についてはいかがでしょうか。

(事務局)

こちらの方で補足させていただいてよろしいですか。

～資料2、4について補足説明～

こういった協議会の場合は、先ほど会長の方からもありましたが、できればざっくばらんにですね、なんかもうちょっと膝をつめた感じで、どんどん意見を言っていただいて、いろん

な意見をこの場に出していただいて、それで皆さんから方向性をですね、すぐにというわけではなくてですね、話し合いながら進めていければなと思っております。

(会長)

今いろいろ教えていただきました。この資料2を見るとだいたい合併してから500人くらい減っているということで、僕が若いころの印象だと3500人くらいずっと確保してた、それからすると1000人近く減っていますね。

感覚ですけど実際よそから入ってくるというと本当に考えてみると数えるほどしかなくて、出ていくことはあっても、1回、泊にあんまりゆかりのない方が入ってこられたことがあったけど、ほとんどゆかりのある方が入ってこられる。外から移住、住まわれる方がないな。なかなかそういう対策がないでしょうけど、どんな意見でも、今ここで結論を出すとかそういうことではなく疑問に思ったこととか「なんでこうなってしまったか」とかあれば。

(委員)

すいません。ちなみに資料2のこの泊と園というのは、泊は港が入って園に浜山が入るということですよ。

(事務局)

そうです。

(委員)

その関連ですけど、その個別の浜山の人口とかはわかりますか。

(事務局)

浜山が、今年の4月ですけれども、178人ですね。園区の方が438人ですね。港区が81人です。

(委員)

この表の泊区の14歳以下が12.3%と、園区が14.6%っていう泊の地域の中では比較的この2つが多いのはやっぱりその港区とか浜山区に若い人が移住とか定住されたことが要因だと思うんですけど、その浜山区のジュニア世代ももう20代とか30代になっておられますし港区も同じ、もうちょっと下なんですけれども今後小学生以下が、さらに急激に減っていくと思うんです。それはやっぱり泊村の最後の方では浜山区の分譲宅地とか港区の県営住宅とか町営住宅を建設した効果だと思うんですけど、湯梨浜町になってからやっぱり住宅供給というのがないので、そういうことが大きく人口減少にも、少子高齢化にも影響していると思います。ただ、なかなか今の時代に大きな分譲宅地とか町営住宅というのは難しいので、なんとか各集落に空き家を発掘して住んでいただくことを今後課題になると今思っております。

(会長)

案外泊でも住んでみたい、住みたい、分譲地というかそういう供給があれば、住みたいという人がまだあるんじゃないかなと思うんです。さっき探しておられる人があったり。

(委員)

泊の町営住宅で空きがかなりあるとか、泊結構人気みたいで空いてもすぐに埋まるって

う。

(事務局)

基本的に町営住宅は、町内どこもなんですけれども、だいたい人気ありますので、町営住宅は。東郷エリアに多いのは所得のどちらかといいますとちょっと低めの町営住宅が多いんですけれども、泊の場合は逆にある程度の一定の収入が所得があるって方っていう町営住宅もありますし。だいたい人気ありますね町営住宅は。

(委員)

僕の感触ですけど、15年くらい前に浜山団地が造成されたころって村報にあったと思うんですけど、泊村の人口増加率って結構県内トップクラスだったと思うんですよ。ただ、旧市街地じゃないですけど密集地の人がどんどんね、浜山や港団地に移っていったらと住んでいた地域にいる人達が3区の中だとか家を建てられないので出ていかざるを得ないっていう形で浜山や港区に出て行ったことがあって、結局3区とか4区とかの中は家が建てられないような形で園の一部も中は似たようなもので密集していると思うんですけど、そういう人が出て行って空き地になっていっているようなところで、僕の知っている人も泊に住みたいと思っている人が3人くらい少なくとも、家を買いたいっていう人がいるみたいなんですけど、結局住むところとか家を建てる所がないという意見があって、その辺をクリアしていったらなというのがあるんですけど。

(会長)

浜山団地ができる前は、僕もこういう仕事をしているので、なくなると土地がなくて田後とかに行かれたという方は実際あります。本当はやっぱり僕らより下の世代でも、泊だったらもしそういう環境を整えればね住みたいなという方、可能性があるような気がするんですけど、民間はなかなか手を入れてこないんで、ある程度行政の方で入ってもいいのかなと。ちょっと話が変わりますがA委員さん、こちらに漁業で移住されたんですけど、その時の選択肢として泊だったとなにかあるわけですよ。

(委員)

たまたま応募した時期が、県の事業なんですけど、毎年たぶん。ちょっと前なら御来屋でした、たまたまその年で、たまたま泊。という感じです。

(会長)

じゃあ御来屋でもあった。泊のその時は応募者は何人。

(委員)

僕と同期がもう一人最後までいて研修事業になるところまで一緒にいたのはもう1人いたんですけど、その方は途中で辞めてしまいました。つい去年も実はその研修という形で32歳の独身の方が半年ほど漁師の先輩の船に乗ったんですけど結局途中で辞めてしまいました。(泊に)住んでしまえばいいなと思います。僕が思うのはこの国道9号がですね、泊の港を含めてなかなか用事がないと入ってこないような地域なんで通りすがりではね、来ないところなんで。僕の考えとしては漁業に携わっている者なんですけど水産資源がそういった費用を稼ぐ一つのメインに考えていくというのは漠然と考えている。住宅の問題も最初僕

が来たときは最初から港区の団地じゃなくて漁師さんのところの空き家を借りて最初住まわせてもらいまして、やっぱり空き家はたぶんいっぱいあると思うんですね中の方とか。結構仏さんが置いてあって1年に1回お盆の時に帰ってくるから、ここは貸せないとか壊せないとか、置いてある家が結構そういうところが目立つなという思いがありました。なのでそこがずっと空き家っていう状態で放ってあるような形があるのかなという。

(会長)

実際、僕が仕事でかかわっている泊出身の方でも都会の方に出られて誰ももう跡取りもおらん、帰ってこんという、家とか畑とか山とかそういう処分をなんとかしてくれという方ももうすでに何人かでてこられている。引き取り手を探している状態があります。

(委員)

すいません、先ほど水産資源をなんとかとおっしゃってたんですけど、昔から栽培漁業センターとかでヒラメをなんとかってというような話題も聞いたりするんですけど、そのあたりは今まで活用できてこなかった。

(委員)

僕が知っているのはヒラメもそうなんですけど、サバをニュースにもなったんですけど生かしたサバを、お嬢サバを大阪に出荷したりして、結局そういうのは、地域の活性という部分にはどうも繋がっていないようなイメージって言いますかね。本当に県の漁業センター、国とか県の栽培センターなんで、どちらかと言ったらそっちの方というか、地域密着という感じではないような気がします。自分が考えているのは、これは案なので漁師さんたちに了解をとっているわけではなく詳しい話は全然煮詰めてもないんですけど、カキです。夏のカキ6月から8月盆過ぎぐらいまで採るんですけど、こういうのが、カキ小屋みたいなものが、期間限定なんですけれども、そういったもので人が寄ってくれるような場所が作れたらいいなというのが、ちょっと漠然とした考えです。小屋を建てたりとか人員をどうするだとか資源が枯渇しないとか、その辺を一つ一つ詰めていかなければいけない部分があるんですけども、そういったこととか、あと漁船を遊覧船みたいな形でねやってみたりとか、お祭りではそういうこともやるんですけど、そういったもので人に来てもらう仕組みを作れたらいいかなというのが。

(会長)

実際漁業で生計をたてている人たち、農業だとか。確実に漁業は減ってますよね。

(委員)

もう確実に、僕が来てからも何人も減ってますね。もう3年後、5年後あと何台減るんだと。

(会長)

農家っていうのも、減ってますか。

(事務局)

減ってますね。農家の方も。

(会長)

宇谷とか園とかね。

(委員)

宇谷もスイカ、梨を作っている農家も2、3軒。ハウス栽培でも減っている、梨とか斜面でコンテナに入れてという作業になるのでどうしても高齢になるとやっぱり重労働になる。最近はどうレンソウとか栽培してみたり、スイカも4、5軒あるか。

(会長)

B委員さんの方は従業員とか何人くらいおられるんですか。

(委員)

今は全部で16人ですけど身内が5、6人くらいで10人くらい。そのうち泊の人は1人で、町内の人5人くらい、あとは倉吉とか気高とか。普段僕、商工会の青年部とかでイベントしたりとか色々なところと協力させてもらったりとかしてやってるんですけど、いろんなイベントをやったりとか、地域経済の活性化というのを最初すごく意識してやってきたんですけど、結局それもなんですけど、なんか物足りないのかなと思うのは地域の方の活性化の方かな、地域の方が本当にやろうと皆が思うようなことを、やろうというか地元愛じゃないですけど、そっちも同じように盛り上げていく必要がるんじゃないかなとはすごく最近思っています。いくらイベントやったりお客さんを外から呼んできても地元の人その受け入れというか気持ちができていなかったらどうなのかなという、ちょっと今思っていて、何ができるっていう格好はないですけど、ちょっとそこも考えていきたいなと思います。

(会長)

「関係ない」って冷めちゃう人と真っ二つになっちゃう部分があると、さみしいわけですけど。

(委員)

色んな人を巻き込んで、やっぱりなんか地元、東郷の人って、すごく地元愛が強いかなと思うんですね。だから地元のイベントとか町内のスポーツ行事とかほとんど東郷の各地区ごとに、ほとんどの地区が出てきて、それはすごくなんか強いな、いいなと思うし、イベントになったらみんなが集まるっていう地元愛とかそういうの、最近その辺もちょっと、もともとはすごくあったような、地区同士で喧嘩するぐらいの仲良かったところもあったような気がするんですけど。さっきの空き家の話でちょっと僕とかちょっと若い人たちでもそういう話をしたりするんですけど、「でもね」と言われるのは、地区に外から入ってきて、その地区のきまりごととか田舎であればあるほどそういうのが厳しかったりとか、逆に地区の方が受け入れたいのに住民の方が閉鎖的な状態があったりとかというのが、そういう例あるみたいで、そこを気にしてる人も少なくないなと思います。

(会長)

僕も体験したことがある実際、やっぱり泊地区とかで仕事しながら目の前の空き家を見た時に、その近所の人知らない土地から人が来る。はっきり、高齢者といっても60代70代の人たちですけど、そういう気持ちを正直もっておられる方もいると思います。今の環境

を変えてもらいたくないというか世帯同士で新しい付き合いが大変だし、場合によってはどんな人が来るかわからないと思っておられる方もやっぱり実際ある。

(委員)

今言ったようなことがムラ社会とかムラ意識とか、よそ者に対して今までのしきたりに基づいてやってくるから歳とってきて人がこなくなって今になっている。さっきもあつたけれども、取巻きをしようかという人がもうおらんだんな人自体が、もう。もうお年寄65、70前後の人に「行こうや」って言っても「たいぎな」になって、そういう人ばかり、人口比率見ても10ポイントくらいなってしまうので、前の平均年齢からすると10は上になっちゃって、それを取巻こうかと思ったら車いすとかで要介護状態というのが今の泊だと思う。だから、宇谷見てもらうとわかるけど、合併時と今時点では世帯数は増えている。これは宇谷の気質だろうけど、分かり家系で本家が地元にあつたりして世帯数は増えているがやっぱり歳はとってくるから人口は減ってきているんだけど。最近では3軒くらい空き家に入って、新しい人も来ている。だけど元々は農業どころだから、農業と漁業だけでも農業の方なんかは梨でも5軒くらいスイカは1軒、ホウレンソウなんかは、うちなんかは今祖母が73だけどあと3年つくって辞めれば無し、だから農業もおそらくなくなるでしょう。

(会長)

今泊の農業って、後継者って若い方っておられるでしょうかね。

(委員)

少ないと思います。来られるのはあるみたいですが、少ないですよね他の所に比べたら。

(委員)

集落でも55歳くらいが3人と、その下が1人。まあ10人いればいい方。だからイノシシもでて梨山はもう草だらけだし。なくなってしまう農業とか。漁師も宇谷は1人だし。

(委員)

もう一人石脇にIターンの方が来られている。

(会長)

C委員さん、あちこちの地域を見ておられると思いますが、泊地域をどんな感じで見られていますか。

(委員)

どこも同じなんですけど、適齢期の方で独身の方が結構いらっしゃるのかなと思います。結婚してすぐ住んでしまえば若い方もいると思うんですけども、小学校とか人が少なくなるその前のところで、先ほど家がないとか造成が必要だとかもあるんですけども、結婚して住もうと決めたらどうにか住まわれるんじゃないかなと思うので、やっぱり縁結び的なところが元気が出る素になるのかなと思ってます。それから浜山地区というんでしょうか、おうちがきちんと並んでいてすぐ全部埋まっていると思うんですけども、(泊地区内は)ぱっとみてなかなか、こっちの空き家とこっちの空き家をくっつけて4区画くらいの団地を造成するとかそういうのは難しいと思います。道も細いので、そうすると今のまちなみを活かしたま

まで、壊して再構築するんじゃなくて、今のままの筋とかで魅力的な街並みになるのかなと、そういった部分を考えていった方が手っ取り早いのかなと感じています。それから質問を一つなんですけども、少し前に泊小学校の校区をなくして他地区の人を入れるということがあるんですが、人が生徒さんが来るんでしょうかね。

(事務局)

羽合小からですね。東郷小は対象になっていないですね。

(委員)

教育委員会の方は羽合小からの泊小学校に入る子を受け入れるっていう形ですけど、ちょっとPTAの方がまだそこまで、この前話を聞いたところでやっぱりシステム自体、システムというかその辺がまだうまくできていなくてですね、理解というかいろんなところで矛盾が起きてくるんですよ。地区ごとに動いていることがあったり、通学とか通学路をどう設定するとか、あと自転車の乗れる範囲をどうするのか細かいことがいっぱいあって、会員の方におろす前にもうちょっと骨組を作ってからという話をしている。それも結局児童数が減ってくると、言い方悪いですけど上の方からつつこみの対象となるから、なんとか最低限の数をキープしたいというのがあってそういう形をとったというのは聞いていましたけどね。

(会長)

今日配った資料の中にも、小学校の生徒の数が減って今と5年後でどうなっていくかというのが、明らかに泊で児童数は少なくなっていく。

(委員)

自分もどうなるのかなと聞いてみたくらいで、とりあえずやってみるというのはいいことでないかと思って、たしか新聞の記事を見て思っています。

(会長)

僕が家を建てた時もやっぱり土地がなかなかなくて、無理を言って今のところを分けてもらったんですけど、その時の選択肢として泊の空き家をなんとか交渉してというような発想はなかったですね。泊のところは、なかなか難しい、ほとんど密集して隣と隣の壁がくっついたような状態で建っているところばかりなので、少なくとも4軒くらいはまとまらないと今の車社会には合わないかなと、せめて今泊地区は自動車の車庫証明が必要ないのでやっていけているが、家の前に車を置くっていうのは、なかなかないかなと。

(委員)

泊の生まれ育った原風景というのがあって、ああいう風景があるのはいいなと思うんですけど、やっぱり中に住んでいる人にとっては、建築規制がかかって家が建てられない。救急車を呼んでも救急車が入れない。デイサービスの送迎についても大変だということで、ある程度の区画整備をした方がよいというような声も聞いていて、この小さな拠点とはちょっと論点が違うと思うんですけど、やっぱり住むところに土地がないっていうのはいろいろなところから（声が）上がってくるなと思います。

(委員)

泊地域に空き家を活用して移住してもらおうと言ったのは、地区の公民館長をしまして、

若い世代が少なくなって、区の行事とかほとんどお年寄りばかりになってきて、この前地区で葬式あった時も本来は自宅でされるときは前日当日に1軒で2人出なくてはいけないんですが、葬式をあげるにも出てきたのが70歳以上の方ばかりで、大変な時代になったなということで浜山区とか港区はまだ若い世代がおられるので、今後もしばらくは大丈夫なんだけれども、旧泊地区とか宇谷とか石脇などは本当に今後地域の運営をするのが本当に大変になってくるなということで、できたら各集落に空き家を開発して入ってもらうのも各区を存続していくためには大切なことかなと、もちろん問題はたくさんありますけど、そちらの方も同時にやっていただきたいなという思いがあって、そういう発言をしたところです。

(委員)

地区の祭りも天気でも運動会にしても公民館でやる、前は運動場であったんですけどお年寄基準になってしまって、本当は私も盆踊りとか運動会を外でしたいんですけど、それさえもなくなって、若い人の意見が言いにくいような、私が来てみて思ったのは親戚同士とか兄弟同士という、結婚する人がいて「よそから来た人は誰だ」という感じで、自分の実家の方は、浜山のようなみんなが来た土地だったので、すごいウェルカム状態だったんですけど、新参者はちょっと住みにくいなとは思っています。だから若者がそれをそういうお年寄りも引っ張って行って役員でもすればいいけど、文句いいのお年寄りばかりで、ちょっとみんな敬遠しているというか、引き受けないという形になっちゃっていると思いました。

(会長)

D委員さん、来られて住みやすいですか。

(委員)

これから先、私の代で店も終わるだろうし、そうすると地区の店もなくなるだろうなと、すごいマイナス思考なんですけど、言われたように地区の運動会があったんですけど、結局走るとかそういう事がなかなか高齢者にとってできなくて、今はもう年に2回ともグラウンド・ゴルフになってしまって、という状態ですね。それからどうにかして結婚してくれる人が増えればそれなりに人口も増えるんじゃないかなと思うし、若い人は若い人で私たちの子どもたちが大学を卒業して都会にでて、都会の大学に出て帰ってくるんだけど結局就職口がなくてまた県外にでてしまうというのが地区でも3軒くらいある。とにかく会社・仕事と結婚する人が増えれば、それなりに人口が増えて、それから人口が増えるということはそこらへんの店が元気に、コンビニでも建ってくるんじゃないかなと。悪循環をどうにかできないかなと思うんですけど、考えるばかりで何も進まない状態です。

(委員)

すいません。E委員にお聞きしたいんですけど、宇谷のことはよく知らないんですけど、宇谷の人って泊小学校はこちらに通ってこられるんですけど、中学校になると北溟中学校、卒業したら高校に行ったりということで、泊地区の方になかなか人の流れがいかないような、特に宇谷や原の人ってそういうところもあるのかなと思うんですけど、わかば保育所の存続も地域の人たちのよりどころみたいなのところがあるのかなと。宗教的なところで言えば灘郷神社さんと一宮さんの祭る神様も違っているわけで帰属意識的なところで宇谷や原の人と

泊地区や石脇や一体となって、泊として一丸となって泊に集まるような帰属意識とかどうなんでしょうか。

(委員)

昔の泊小学校の原分校というものがあつた。それで泊に負けるなという意識がある。それで、宇谷は宇谷でかたまる、原は原でかたまる、分校で、そういうことが今の70何歳の親でその子どもがそれで育っているから、「なにが泊が」でやっぱり宇谷は宇谷で意識があるし、原は原であるのではないか。逆にいえばそれだけ元気があつた。神社とかそういうものは関係ないと思う。

(委員)

どうしても、泊よりは、買い物行くにしても泊行くよりは、泊に店がないということもあるんですけど、便利な羽合に行っちゃうんで、いかにこの小さな拠点を、人の流れを旧泊地区の方に流していけるかという点。

(委員)

拠点をどこに置くかによる。宇谷に置くかということも含めて。そういう意識は強い、元気がいいということ。

(委員)

泊と園以外は全部集落が分かれている。間、間(距離)がある。それぞれで地域のコミュニティの意識が強い。よく言えば意識が強いんだけど、悪く言えば閉鎖的。僕の会社が小浜の方にあるんで小浜の方の地区にも出ているんですけど、僕が最年少なんです。1個上に1人いて、あとは親世代70歳代の人ばかりで、外から来た人も何人かいらっしゃいますけど、やっぱりしゃべれる状態ではないし、そのへんは、地域性といえば地域性ですけど、それが泊。それを否定する必要はないと僕は思う。どうすればよいかと思う。

(事務局)

～検討協議会の役割、スケジュール、視察、今後の流れについて再度説明～

(会長)

視察というのは、大案ができてから、その方向性が決まってからやるもんだと思います。こちらとしても方向性を出して、それに見合う場所があれば。途中いい段階でみんなで相談して決めましょう。行って気付くこともあるでしょうし、もう少しこちらの方のある程度意思統一をですね、みんなの状況なり、意見交換をする機会をもらってから。ここでみんなの意見を出してみても、実行可能な状態を作らなければいけない。それを役場の方で今度は事業化したり予算化して実行に移すということで、最終的には。単体で例えば泊区の方で区長さんのそれぞれの意見を聞いたりだとか、入ってくるとか。あとは中身をどうするか。

(委員)

資料4でも、意見は載っているが、地区地区で何人くらい来ていた意見なの？その会合で。宇谷では160世帯、500人いる。そのうち何人来ていて、この「宇谷」という意見となっているか。

(事務局)

宇谷は20～30人くらい。

(委員)

この文章で区の名前が出てくるというのは、何かその区の見解というふうに見える。

(事務局)

会場です、その会場で出た見解ということです。

(事務局)

こういう見解があったということですので、区の見解というわけではないです。

(委員)

泊は漁村センターが会場だったけれども、30人弱だったと記憶しています。

(会長)

僕らの役割としては、そのあたりをもう一度きちんとしておかないと、ただしゃべっただけで終わってしまっただけではいけないので。たぶんこのまま何もしないと、このまま人口が減って行って、おそらく住む人がいなくなっていく、人口が減っていくというふうになってしまうのかな。でも、もしくは自立していくのか持続していくのかということもあるんでしょうけど、たぶん、このままではいけないというところで、何かしら、人の流れなのか仕事を作るのか何かを考えていかないといけない。そうじゃないと、20年前からどっと人が減っているということだから、そこで何か手を加えることがあって。やっぱり一番の問題は住民を増やすということですよ。まずは住む人を増やす。増えてきたら自然とお店もコンビニが出来たりするのかもしれないし。では何からやっていくかということ。

(委員)

町というか合併する前からあった、そういう施策とかやってきたこととかはどのようなことがあるんですか。

(事務局)

こういったものを何とかしないといけないよね。といった話が出てたっていうところで、具体的な検討会というようなものはなかった。

(委員)

検討会というか、例えばこういう補助金を作って、受け入れもしてとか、人口増というか泊地域とか、今回のような形のものに対しては。

(委員)

ソフト的な取り組みというのはなかったんで、それこそ平成の頭のあたりは地域総合整備事業債などはこの町村も、ハコモノを作るのに一生懸命で、ここもグラウンド・ゴルフの公園、交流人口を増やそうということでしたこともあるし、それと先ほどから話題にあがっている浜山団地もそうですし、それから合併以降縮小されて今もあるかわかりませんが、5万円の出産祝い金制度、出産、小学校入学、中学校入学と三回、人口流出に歯止めをかけるという部分での取り組みというのは、合併前からやってはきたけれども、浜山団地などはそれこそ30、40世帯ほど造成してみんな埋まって、ただ最初の方の見解であった通り泊

区の中からでてきた人というのは割と多かった、外から入ってきたというのはごく少数ということもあったので、純然たる人口増には繋がっていないけども、人口減少には歯止めがかかった。そのかわり泊区の中の旧の家が空き家状態になっているということはやっぱりあります。

(会長)

今浜山は、子どもの(年齢が)上がってきていて、保育園も少なくなってきた、30年くらいでごろっと変わってきている。

(事務局)

今がちょうど小学校の3年生以下くらいからが、毎年10人台です。0歳児、1歳児、2歳児、3歳児~というのが。去年が小学校入学生で10人になって。ですから1学年段々少なくなってきたというのが事実です。今もう少し高学年代になると30人台とかありますけど。

(委員)

浜山団地がものすごく人気が高いとさっき、町営住宅とか。なにゆえ人気が高いのでしょうか。

(会長)

今年入った人の意見で、田後か長瀬とか羽合地区から来た若い世代けども、案外住んでみるとJRが近く駅があるし、インターが近いし、住んでみると住みやすい。倉吉で飲んでも車で帰れるなど、住んでみると案外住みやすかったと彼らが言っていた。

(委員)

仕事さえあれば、この泊に住んでもよい、住みたいなという人、仕事を持っている人だったら魅力的に写るんですかね。

(事務局)

浜山の1期も2期もすぐに売れましたよね。

(委員)

場所としてはすごく人気があるということは、あとは仕事ですよ。ここから仕事に通える、仕事があれば住んでみたいと思う。人気があるんなら、問題点は仕事があるかということですね。

(委員)

車が運転できる人は、羽合が倉吉に比較的近いので便利。ここに住んでも便利というのがありますけれども、やはり車を持ってない高齢者にとっては大変なことになっているということも認識しておかないと、これから高齢化が進んで、今は車が運転できる方もできなくなった時にこの地域をどうするかということを課題にもなっていますけど、車のある人は、住みやすいというか環境もいいし、静かだしというのがありますけども。

(委員)

鳥取も通勤圏内であり、車に乗る人にとってはそんなに不便ではない。買い物も羽合まで行けば、青谷にもスーパーあるし、やはり車を運転されない方、これまで旧泊地区で商店で

買い物をされていた方などが閉店すると買い物をするところがない、かといって移動販売が良いかという、やはり見て買いたいという人が結構おられて、社協も乗り入れバスというので、泊を月に2回かな、してますけど、行かれる方は。

(委員)

コミュニティバスってなかったでしたっけ。

(委員)

1年ちょっとで。要望は多かったんですけど、乗る人は少なかった。あれはぐるっと1周回るので時間がかかるというのがあって、例えば泊から羽合とか松崎からはわい温泉というピストンみたいな形ならもう少し需要があったかなと。潮風の丘まで上がったりしていたので、時間がかかるのがネックだった。

(事務局)

ただ決める時に、地元全部回ったんですよ。「うちにも」「うちにも」となってしまうんです。

(会長)

例えば一つの案として、ここ（協議会）の役割として、今出ていた人口が減らない、増えるという方法を考えるということと、お年寄りがどうやったら暮らしやすいかというようなところに着目して、小さな拠点というものをどういう形なのか、集約するのかわからないですけど、そこを基本に僕らの話は計画を作っていくということで方向として大丈夫でしょうか。人口は増やしたいというのを目標のひとつと、移動手段のない高齢者をどうやったら生活しやすくなるかということ話し合う、それに向けて、意見を出し合うということではないかなと。どうですか。

(委員)

お年寄をターゲットにするのか、若い人をより入れて子どもを増やすのかどちらかなんですか。

(事務局)

両方です。

(委員)

暮らし良しの倉吉のように高齢者が住みやすいということの受け入れなのか、若い人が嫁いで家を持ってということを両方ですね。

(委員)

でも、さっきの地区の意識が高いということがあり、この小さな拠点となると泊地域で泊だけを圧縮した地域づくりなのか。宇谷まで入れるとなると大きくなるし。

(会長)

どちらも暮らしやすくないとだめなんじゃないかと。そのためにはどうすればよいかということ話ししていく。

(委員)

イメージ的には小さな拠点なんで、拠点となるのはどこかという点とそこから各集落を線

でつなぐ、交通手段を考えなくてはならないかなど。

(事務局)

それともう一つ、合併当時は、その前からですけど、ここもですが、施設が老朽化してまず実際のところ。この公民館、役場とか青少年の家だとか漁村センターとか古い施設もあるので、従前から役場としても方向性をどれが一番良いのかということもあるので、今言われた人口増やお年寄りが暮らしやすいまちというところで、そのあたりも含めて、これがよいという意見も合わせて話の導線として検討していただければと思います。

(オブザーバー)

資料1の8Pをご覧ください。下にイメージ図が描いてありますけれども、どこかに全体の拠点となるような所が、これでいうと道の駅とか診療所の下に書いてあるんですが、拠点があって、先ほどおっしゃったように集落をつなぐのはまた別の形でつないだりですね、集落の役割ということがまた出てくるのかもしれないなと思います。こういったものを少しイメージされると話がしやすいかと思います。一言だけ。

(会長)

また議論はしていくんですけど、今の目標としてはさっき言ったようなことを、人口を増やすにはどうしたらよいかということとお年寄りがこれからどうやって暮らしていくのにどういう方法があるかということ。

(委員)

結局はそこになってくる。そこにいくためのプロセスをどうするかということ、だと思ふ。一極集中にしたら結局泊にまた人が集中してしまうこともあるでしょうし。

(会長)

もういまさら動かないというお年寄りも。でもこのままずっといってしまったら。オブザーバーの方からなにかありませんでしょうか。

(オブザーバー)

この会のあり方が、こういう人数でいいのか、もっと多様な組織団体をメンバーに入れるのか、もう少しあってもいいではないかと思うんですよ。結局あと部会なども定めていくわけ。

(事務局)

ある程度進めていって人が多くなれば。

(傍聴者)

部会をするならもう少し人数が集まらないと議論ができないんじゃないかと。部会は部会で人数を集めてもらえばいいが。

(事務局)

一番全員で話をするのがいいんでしょうが、そうは言ってもある程度固まって話がしやすい環境の方がいいのかなというところですね、部会というのは。

(会長)

実際、高齢者のことはまだわからないところがある。本人の中の意見がたくさんあると思

うので、そこをどう反映するかということで、それぞれ自分のお父さんお母さんに話を聞いてくるとかになるのかなと思う。要介護で、そういう状況をどうすればよいのかなというところを考えていかなければならないのかなと。自分の立場だったらと考えればよいと思います。自分がこれから先々80歳、90歳まで生きたとしたら、これでよいのかなということ

(事務局)

ある程度問題点を出してもらって、まずそれを整理してどう解決していくかということだと思っ

(事務局)

最後は自分たちに何ができるかという意見も言ってもらいたい。

(会長)

いいですか、その認識で、1回目として。次回までに、持って帰ってもらって考えてもら

～今後の進め方を決定～

- ・ 9月30日までに各自の考え（泊地域の問題点、良い資源など）を役場へ提出（メール、郵送等）して、会議前にまとめておく。
- ・ Eメールを活用して、通知、資料など情報提供を行う。パソコンのない方は郵送などで対応。会議資料はメールで送付後、紙でも送付する。
- ・ 次回（第2回）は10月19日（水）18：30から中央公民館泊分館で開催。
- ・ 先進地視察の参考に漁村の事例を探す。

(会長)

最後にこの8番のその他のところ。

(事務局)

情報提供だけになるんですけど、鳥取県と日本財団が様々な連携をしている状況です。その中で中山間も含めて小さな拠点に関する事業も取り組んでいるところです。その流れの中で日本財団の方から例えば小さな拠点や活性化をするような地域にコーディネーターのような方を派遣したり、入ってもらおうということが可能なようです。必ず入れるというものでもないですし、今後皆さんが進めていく中で、この方法もあるということ覚えておいていただいて、「この人に来てほしい」ということがあれば声掛けをしてください。

(傍聴者)

具体的には地域おこし協力隊のOBとかですね、よその県とかよその地区で小さな拠点に取り組まれたとか、新たに地元のサービスを始めた方ですとか、そのような取り組みをされている方ですとか。ですから、経験を踏まえてこういうところならこういうことができるんではないかということをおアドバイスをいただけると。

(会長)

そういう講師の方のリストみたいなものがないとわからないかなと、どのような人かというリストがあればと思います。

(事務局)

わかりました。

(事務局)

それは、指名することはできるんですか。

(傍聴者)

指名は基本的にはないです。2、3人の中からきていただく。

(委員)

先日の町長と語る会でも出てましたけど、湯梨浜町全体でまちづくり会社を作ってそれぞれの地域でやっていくということで、そのまちづくり会社もこの小さな拠点に関わるんでしょうか。

(事務局)

すぐにつながるものは浮かばないんですけど、内容によっては関連してくるものももしかしたら出てくるかもしれないぐらいな、小さな拠点とは別に。ただ、販売かなにかが出てきたり、内容によるとは思うんですけど、具体的にありますか。

(事務局)

実際のところまだ詳細を、新しい会社が1から10まで、この項目をしますということをまだ決めていないんですよ。とりあえずできるところからやっつけていこうかというもの。ただ、生涯活躍のまちの中でも泊エリアについては小さな拠点でやっつけていきたいと思いますという位置づけはしています。

(会長)

それでは、今日は終わりにしたいと思います。お疲れ様でした。ありがとうございました。